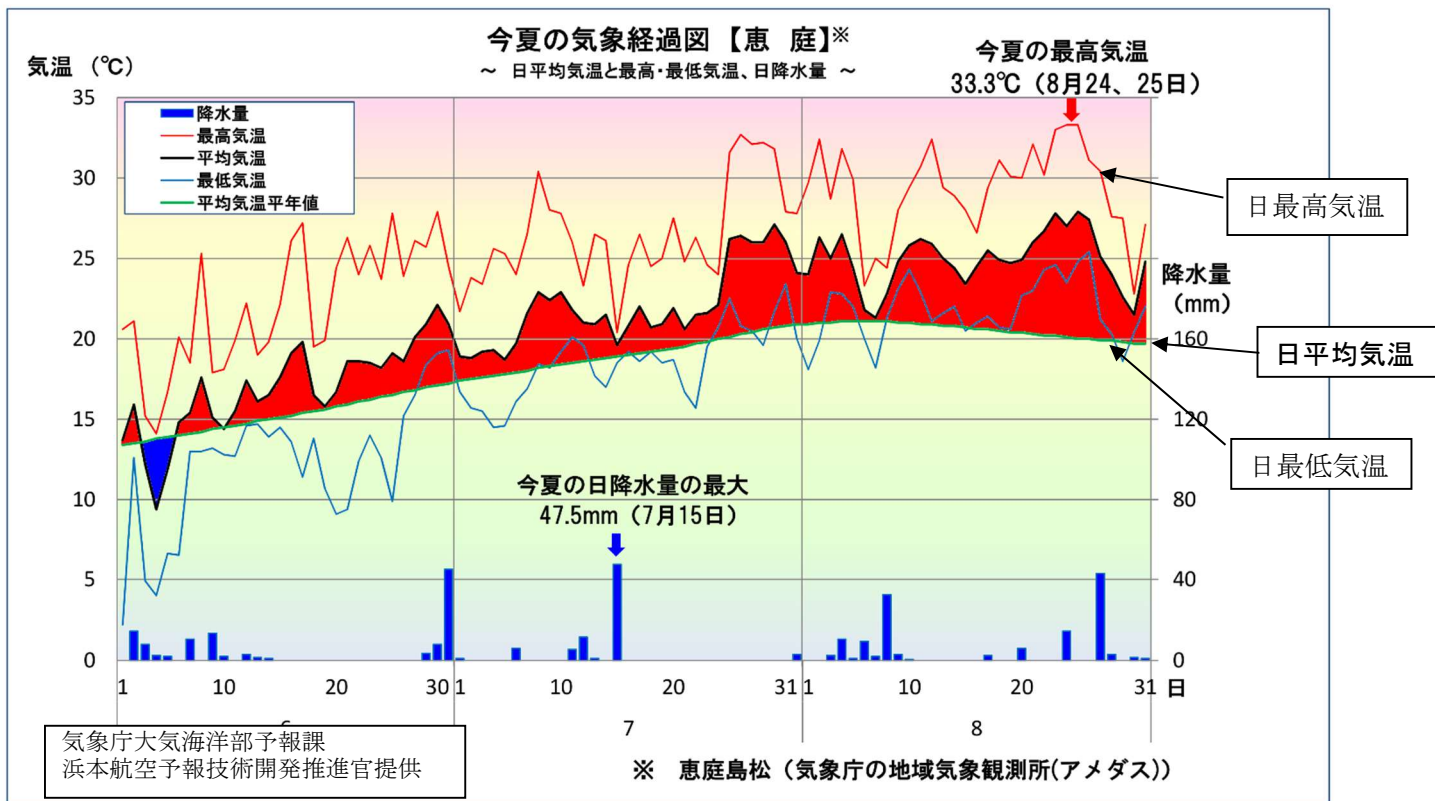


季節のまとめ

【今年の夏を振り返って】（令和5年6月～令和5年8月）

防災士 清水 為一



概況

今年の夏は、グラフで見られるように、未曾有の猛暑でした。特に8月は月の半分が「真夏日」（日最高気温が30度以上）となり、また25日から26日はついに「熱帯夜」（日最低気温が25度以上）となりました。本州では、連日熱帯夜が続いていましたが、恵庭にとっては観測史上初めての経験でした。

月別経過

6月

上旬は低気圧や湿った空気の流入により曇りや雨の日が多かったが中旬から下旬にかけては高気圧に覆われ晴れた日が多かった。30日から1日にかけては北海道の南岸を低気圧が通過したためややまとまった雨が降った。気温は、南から暖かい空気が入りやすく、月平均気温は6月として高い方の第2位となった。

- * 日最低気温 19.3度 (30日) 6月として高い方の第1位
- * 10分間降水量 5.5mm (30日) " 多い方の第6位
- * 1時間降水量 22.0mm " 多い方の第3位
- * 月平均気温 16.9度 高い方の第2位

7月

上旬・下旬は高気圧に覆われた晴れた日が多かったが、中旬は低気圧や前線の影響を受けやすく曇りや雨の日が多かった。期間を通じ太平洋高気圧の縁を回って南西から暖かい空気が流れ込みや

すくかなりの高温になった。月平均気温が7月として第1位となった。

*日降水量 47.5 mm (15日) 7月として多い方の第8位
*日最高気温 32.7度 (26日) 7月として高い方の第8位
*日最低気温 23.4度 (30日) " 第1位
*月平均気温 22.0度 " 第1位

8月」

期間を通して太平洋高気圧に覆われる日が多く、また、気圧の谷に向かって南からの暖かい空気が流れ込む日が多く、記録的な高温となった。

*日最大10分間降水量 14.0 mm (27日) 8月として多い方の第4位
*日最低気温 25.4度 (26日 熱帯夜) 8月として高い方の第1位
" 24.8度 (25日) " 第2位
" 24.6度 (23日) " 第3位
" 24.3度 (10日) " 第4位
" 24.3度 (22日) " 第5位
" 23.5度 (24日) " 第6位
*月平均気温 24.9度 8月として高い方の第1位

§ 猛暑の原因 §

今夏の猛暑の原因について次のことが指摘されている。

1,

7月後半の顕著な高温は、フィリピン付近で台風を含む積雲対流活動が活発だった影響で、日本付近で上層の亜熱帯ジェット気流が北偏して暖かい高気圧に覆われるとともに、下層の太平洋高気圧の張り出しが記録的に強まったことが主因と考えられる。フィリピン付近での積雲対流活動の活発化には、冬に終息したラニーニャ現象の影響で、熱帯インド洋において積雲対流活動が平年より弱かったことが影響した可能性がある。また、日本付近の亜熱帯ジェット気流の北偏にはヨーロッパ・地中海方面でのジェット気流の蛇行の影響が及んだ可能性もある。

8月前半は、亜熱帯ジェット気流の北偏が顕著だったことに加え台風第6号と7号に伴って南寄りの暖かく湿った空気が日本付近に流れ込み、記録的な高温となった。また、今夏の顕著な高温には、上記の要因に加え、持続的な温暖化傾向に伴う全球的な高温傾向の影響が加わったと考えられる。また、北日本の記録的な高温には、周辺海域での海水温の顕著な高温状態が影響した可能性もある。
(令和5年8月28日 ~異常気象分析検討会の分析結果の概要~より抜粋)

2,

ジェット気流の蛇行でヨーロッパの地中海方面は大きな気圧の谷になり、北アフリカのリビアでは9月11日には「メデイケーン」と呼ばれる低気圧により僅か1日で1年分の大雨をもたらした。この大雨により、大洪水が発生し、多くの犠牲者が出た。

ジェット気流は、川の水の流れに例えられる、例えば流れが急な川では殆ど蛇行が起きないが、流れが緩やかな川の場合、一様な流れではなく蛇行しやすくなる。

ジェット気流は赤道付近と北極の温度差が大きいほど強くなる傾向がある。しかし、近年の地球温暖化により、南北の温度差が小さくなっており、これも蛇行が発生する要因と考えられる。

3,

気象庁は、今年の夏は「統計開始以来、最も暑かった」と発表したが、北海道も時計開始以来の極値を更新した地点が多数あった。恵庭でもグラフで示されるように7月下旬から猛暑となり、8月下旬には「**熱帯夜**」に近い状態が続き、寝苦しい日が続いた。

4,

このように今夏は未曾有の猛暑に見舞われたが、その要因をみると「今夏だけが猛暑になった」とは言い切れないように感じる。例えば、北海道周辺海域の海水温が上昇しているため、従来捕れていた魚種（鮭・さんま等）が捕れなくなったり、農作物が高温障害で殆ど収穫できないなど、日常生活に影響を及ぼし始めている。異常気象分析検討会の指摘にあるように「持続的な温暖化傾向に伴う全球的な高温傾向の影響が加わった」とされていることから、今夏に留まらず来夏も今夏同様の猛暑になる可能性があることを危惧している。（文責：清水）

7月後半から8月の顕著な高温をもたらした大規模な大気の流れに関する模式図

（～異常気象分析検討会の分析結果の概要～より引用）

